

⑤4 生き物と触れあえ市民に愛される堺泉北港生物共生型護岸での取り組み

受賞機関 国土交通省 近畿地方整備局 神戸港湾空港技術調査事務所

全建賞審査委員会の評価ポイント

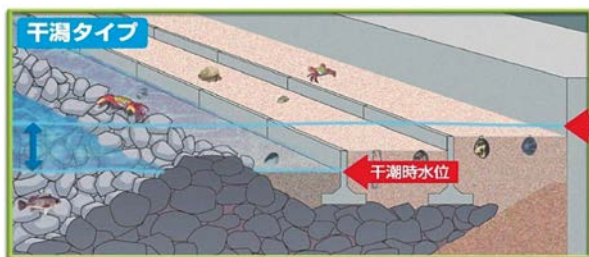
生物共生型護岸の築造によって、市民が海に触れあえる場が創出されたことを契機に、築造直後から国が毎年実施しているモニタリング調査に加え、市民の方々による生き物観察会や生物専門家を招いた市民調査を継続している取り組み。大阪湾に対する住民意識の醸成、市民団体ネットワークを通じた大阪湾の生き物に係る知識・調査ノウハウの水平展開といった市民連携の成果を評価。

1. はじめに

大阪湾は、護岸や防波堤等、海岸を守る施設が直立型で整備されており、埋立などにより砂浜や岩礁等の自然海岸等が消失しているところが多い。また、大阪湾奥部においては、水質汚濁、生物多様性の低下等の問題を抱えており、これらの大阪湾の環境問題に対して、護岸等の老朽化対策や耐震性の向上とあわせて、生物生息機能を付加することが検討されている。

2. 事業の概要

堺泉北港堺2区は、海水の停滞性の強い大阪湾奥部に位置しており、周辺海域の水質汚濁が慢性化している。また、多くの海岸施設と同様に、直立式の護岸となっており、潮間帯に生息する多くの生物が定着しにくい構造であった。このような中、海域環境改善施策として、生物環境の形成を図ることを目標に、平成21年12月に、干潟タイプ、緩傾斜護岸タイプ、魚礁ブロックタイプの3タイプの生物共生型護岸が築造された。築造直後から、生物相等のモニタリング調査が行われ、1年目から生物は順調に加入し、現在に至るまで、各護岸タイプの干潟や岩礁性等の特徴に応じた生物生育機能を維持していることが確認されている。



生物共生型護岸（干潟タイプ）

3. 事業の成果

生物共生型護岸は、海砂を使った干潟や大小の転石を設置した護岸、魚礁ブロック等、多様であり、国が毎年実施しているモニタリング調査に加えて、市民やNPOの方々による生き物観察会や市民調査が行われている。市民調査等における参加者は、平成25年度は約280名、平成26年度は約170名、平成27年度は約170名にのぼっている。生物専門家による海岸生物の詳しい説明や、種の同定において大阪市立自然史博物館等の学術専門家の協力を得る等により、市民調査における調査精度を確保している。この生物共生型護岸を通じて、大阪湾の生物に関する専門家との協力・連携、大阪湾に対する住民意識の醸成、市民団体ネットワークを通じた大阪湾の生物に係る知識・調査ノウハウの水平展開といった市民連携の成果が得られている。



干潟タイプでの生物観察会

4. おわりに

生物共生型護岸の築造によって、沿岸域において市民が海に触れあえる貴重な場が創出され、築造直後から市民やNPOの方々による生き物観察会や市民調査が行われており、生き物と触れあえる、様々な海岸環境の観察の場として市民から愛されており、近畿地方整備局が大阪湾再生の取り組みとして実施している「大阪湾生き物一斉調査」のフィールドにもなっている。大阪湾の生物相の豊かさを実感し、海への親しみをもち、美しく親しみやすい豊かな「魚庭（なにな）」の海の再生のための取り組みの輪を広げている。

賛助会員 いであ(株)